

---

# アガペー

rozan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アガペー

### 【Zコード】

N3027C

### 【作者名】

ronan

### 【あらすじ】

『アガペー』

往年のメロドラマ設定とストーリー。

伯母から出生の秘密を明かされて苦悩する涼子は、交通事故で半身不随を余儀なくされた拓也（義兄）への淡い恋心を抱えていたのだが、病床の拓也から愛を告白されてしまつ。

涼子は、そんな二重の切なさに胸を締め付けられていたある日、四国の方にルート探しのに旅立つが、予期せぬ老いさらばう祖母の驚

懶な半生と向かひつてしまつた涼子は、まさかの決断をする。

涼子が家に戻つてみると、三年ぶりに来訪していた古賀の伯母が玄関に出迎えて「お帰りなさい涼子さん。あらステキなお嬢さんになられたわね」と、懐かしそうな眼差しを向けてそう言った。

「いらっしゃいませ伯母さま、元気そうでよかつたわづ」と言つ涼子は、顔艶のいい笑顔の伯母が懐かしく思えていた。

「それならいいんだけども、以前から坐骨神経痛があつて歩くのがしんどかったわね。それで拓也（涼子の兄）さんが交通事故に遭つて入院されたと聞かされてはいたんだけども、そんな訳で見舞うことが出来ずについたんだわさ。でも、このところは少し歩めるようになつて、今日やつとお見舞いに行ってこられたわね」

伯母はそう言いながら玄関脇にある六十平米程の応接間の扉を開け入つて、その中央に置かれたダーク・ブラウン色の重厚なソファに、深々と腰を沈め込む。

拓也は三ヶ月ほど前に恵比寿駅前交差点の青信号を歩行して横断中に、酒気帯運転手のトラックに巻き込まれて坐骨損傷で入院を余儀なくされていた。

「今日、私も見舞いに行つて来ましたから、伯母様のことは兄から聞きましたのよ。いろいろ心配をお掛けして、本当にご免なさい涼子は伯母に続いて応接間に入り、ソファに並び坐つてそう言つた。

「あら、一足違ひだつたわね。それにしても拓也さんの手脚が自由なままでしまつだなんて、不憫で慰めの言葉が見つからなかつたわさ」

「伯母様つ、兄はきつと治ります」

兄の再起を信じて疑わない涼子には、治らないと決め付けているかのような伯母の言動が不愉快だった。

「そだつたわ、迂闊な言い方をして本当に免なさいよ。さつきも弟（涼子の父、康次郎）にバカなことを言つて怒らせてしまつたし、どうかしてくるわせ」

「えつ、父と喧嘩つ？」

「いやねつ……」と伯母が話すには、静恵（涼子の母）が拓也を身籠つた時期と重なつて子宮体癌だと診断されたにも拘わらず、それでも頑強に治療を拒み続けて命と引き換える覚悟で拓也を産んだ静恵の心痛を察しているが、あっけらかんとしている弟のふやけた表情を見ると、ついハツ当たりしてしまつ。とのことだった。

「そつなんだ、伯母様」

「だから、ちつとも弟に何のかんのと瞞み付いてしまつたなんだけど、むつとした表情でどこに行くのか荒々しく玄関ドアを『バタン』と大きな音立てて閉め、外に出ていつちまつたわね」

氣丈にそつ言つ伯母は、後悔といつよりも誇りしげな表情のよう

でもあつた。

「兄のことを心配しているのは父も母と回りではないかしら  
涼子は男親と女親の愛情表現が違うのは当たり前ではないかと、思つていた。

「解つてはいるんだけど、性分で厭味を言いたくなるんだわぞ」

「……伯母様つ、母が兄さんを出産した時、母が『子宮体癌だつた』と言つたけど、出産後には癌の摘出手術を受けたのかしら。それに私の出産時はどうだつたんですか？」

涼子は母が癌だつたなどとはこれまで一度として聽かれたことはなかつただけに驚きで、それに自分の出産時のことも気になりまして、伯母にそう訊いた。

「ああ、どうだつたかしらねえ……」

伯母は空々しい言い方に変えた。その時、家に戻つて来た静恵が応接間のドアを開けて顔を突き出して、帰つていたのね涼子。二度とあんなバカな真似はしないでちょうどい。お陰で一睡も出来なかつたんだから」

静恵は涼子をヒステリックな声でそつ怒鳴つたが、伯母様の居る手前すぐに笑顔を浮かべて見せる。

「御免なさい」

「久し振りに古賀の伯母様がいらつして下さつたから、今夜はご馳走しようと買い物をしてきたのよ。ですから涼子にも料理を手伝つてもらうわよつ」

静恵は買い物袋を手にぶら下げながらそつ言つて、台所に向かつて行つた。

「静恵さんは何を怒つているのさつ？」伯母は涼子に興味有りげに訊いた。

「大学テニス部の私の女性友達が関東大会のシングル部で優勝したの。それで、お友達の家でする祝賀パーティーに私も招かれて、ほんの少しお酒を飲んだだけでも気分が悪くなつてしまつたわつ」

「涼子さんは、お酒が合わない体质なのよ。よそ様で体調を崩して

しまつては、さぞかし困ったでしょう

「お友達が『泊まつて行つた方がいい』と言つてくれたから母に電話をしてみたんだけど『その喋り方は少量のお酒ではないはずね。そんな乱れた姿で他人の家に泊まるなんてことは、絶対に許しませんから』だつて。それでも勝手に泊まつてしまつたわ。だから今日は直接家に戻りにくいし病院の兄を見舞いに行つて來たんです」

涼子は不満げな表情でそう言い終えると笑顔を見せた。そして首を竦めて舌をペロリと出して見せ、静恵のいる台所へ小走りに向かつて行つた。

1 - 3

「お父様はどこかへ出かけた見たいだけじ、どこへ行つたのかしらねえ。貴女、知つてゐる？」

台所にいる静恵が、涼子の顔を見るなりそう訊いた。

「私が戻つた時には、伯母さましかいなかつたわよ」涼子は伯母から聞いた話を隠す氣は無かつたが、伯母の厭味ごとに耐え切れず、に父は何処かへ出かけてしまつたなどと、敢えて母に言つこともないと思つていた。

「そう。このところ日曜日でもゴルフに出かけなくなつたお父様つたら、気晴らしにパチンコを覚えたみたいなの。当人は家族に知られていないと思い込んでいるみたいだし、知らない振りをしてあげてるのよ。でも、けちで飽き性だから、何時ものように少し負ければ帰つて来るでしよう。では涼子お野菜を洗つて刻んで頂戴」

静恵はそういうて、買い物袋の中から赤いピーマンを四つ取り出して涼子に手渡した。更に「お父様ったら伯母様と言い争いしたんでしょうよ、きっと。昔から顔を合わせると喧嘩する犬猿の仲だ

つたから、久しぶりに会ったとどけひで一向に変わっちゃいない一人なのよ」と言つた。

来客や父の居る時の静恵は涼子に優しく接しているのだが、普段、涼子と二人っきりで居る時の会話はギクシャクし、挙句は口喧嘩になることも多かった。そんな静恵の横顔を見ていた涼子は、勘がいいと思うのだった。

「涼子、ほんやり突っ立つていないで、早く手伝いなさいな

「…………」

涼子は「お母さん」と軽を掛けようとするのだが、躊躇する。だが、思い直すと再び静恵の横顔を凝視して「母さん、兄さんを出産する時に子宮癌だつたのね。私、知らなかつたから本当に驚いてるわ」と涼子は、さほど深刻な問題と捉えていた訳ではないが、それでも心の中には言い知れぬ妖雲が漂いだしていた自覚があった。見る見る顔が赤らむ静恵だが、調理の手を休めると荒々しくエプロンを脱ぎ捨てた。そして「古賀の伯母様ねつ」と静恵は語氣を荒くした。

「あらつ、別に悪いことを聽かされた訳ではないんだし、そんな言い方しなぐつても」静恵は涼子の言葉を聞き流しているかのように、そっぽを向けてしばらく押し黙つたまま立ち尽くしていたのだが、突如、血相を変えて台所から飛び出すると、応接間に入つて行つた。

「この家では拓也の問題で家族は忍び難い思いをしていますのに、涼子に何を聽かしたんですの?。この上に余計な波風を立てられては、それこそ我が家は崩壊してしまいます」と、眉間に青筋をたてた静恵からけんもほろろに言われた伯母だが、詫び言葉もそこそこ

に神経痛とは思わせない達者な足取りで、そそくさと藤倉家から立ち去つた。

誰もいなくなつた応接間のドアを閉じて室内に籠つてしまつた静恵の動搖振りに涼子は呆気に取られて不可解さと後悔が入り交じつて心は萎えていた。

間もなく家に戻ってきた康次郎の声を聴きつけた静恵は、何食わぬ顔つきで応接間から出て玄関口で康次郎を出迎えた。

「姉（伯母）は帰つたのかい」康次郎は姉の履物が玄関になかつたことで、静恵にそう訊いた。

「ええ、さつき帰りましたんですよ」

「食事もしないでかい？」

「ええ」

「子供のころからオテンバのあれ（伯母）が苦手だよ。未だに顔を合わすと衝突してしまうんだ。さつきもそんな事が有つたから帰つてしまつたんだろうけど」

「…………」静恵は涼子と顔を見合させて、言葉を詰まらせた。

「ところで涼子、友達の家であつたとしてもだよ、淫らに酔つて恥をさらすなんてことは学生の分際で一度とあつてはならんことだつ」康次郎は静恵の傍らに突つ立つてゐる涼子に一瞥を投げ、そう一喝をした。

「もう大人なのよ。お酒ぐらい皆飲んでるわよ。チョッピリ飲んだお酒で酔つてしまつたの、飲みなれない私だけだつたんだから。それでも淫らになんて酔わなかつたわよ。でも、前もつて話しておかなかつたことは謝るわ。『免なさい』

涼子の言葉に安堵した康次郎は、パチンコの負けも重なった浮かない顔が綻んだ。だが、その後に食卓を囲んだ静恵と涼子の白けた雰囲気を感じ取る康次郎は「今日はどうも、一人の様子が変だ。何か言い争いでもしたというのかね。それとも拓也に何か?」そう訊きながら、恐る恐る静恵と涼子の伏せ顔を覗き込む。

1 - 5

「……今日、伯母様と私は兄さんを見舞いに病院に行つてきたんだけど、兄さんは相変わらず強がりを言つていただけよ。でも知りたくて担当医には会つて見たわ」

「……それで、拓也にその結果を話したのかね」

困惑顔の静恵と康次郎は、拓也のためを思い重度な症状のことは隠し通していたのだが、涼子から拓也に話されてしまったのかと気になりだした。

「担当医が、『症状についての詳細は、両親によく説明してありますよ』とだけしか言つてくれなかつたのよ。でも兄は『隠さんでいい。もうこれ以上は良くも悪くもなりやしないんだから』と言つて、自暴自棄に陥つていてるみたいだつたわよ」

「…………」

康次郎は、無言でパイプ煙草にライターの火を傾けた。

「担当医から兄に説明してもらつた方が、兄さんは思い惱んで卑屈になつたりしないんじやないかつて思つたわ。兄は伯母様に『再起不能になつた』と言つたそうよ」

涼子は、康次郎の横顔に怪訝な眼差しを当てて言つ。

「……涼子に隠しておく積もりはなかつたよ。ただ医師からなんとも悲しい説明を受けてしまつたことが、未だに信じられないでいる

だけなんだ

「…………」

康次郎の言葉の意味が汲み取れて、涼子はその場にいたたまれず、二階の自室戻つてベッドの上に力なく体を投げだした。そして何時しか眠りについてしまったのだが、深夜の窓を激しく叩く雨足に眼をさまし 大好きな兄の将来はどうなつてしまふのか、などと思ひ起す。

そして古賀の伯母が言つ「子宮体癌」の言葉の反芻と、静恵の取り乱した不可解さも沸々と込み上げる涼子は、徐ら半身を起こしてベッドから降りると本棚に歩み寄つて、分厚い家庭医学書をとりだした。そして括るページの『子宮に生じる癌種。子宮頸癌（主として偏平上皮膚癌）と子宮体癌（主として腺癌）あり、前者の軽度は高く出血・帶下などに始まつて、進めば疼痛・全身衰弱を来す』と記された行に視線をおとす。更に『子宮摘出手術を施した後の妊娠は望めなくなり……』との記述に田線を釘付ける。

その潤む活字の中に、過去の出来事が千々に錯綜しては相馬灯の様に回り出していた。

『私って誰』 知ることで今のは死ぬんだわ。でも、このまま心の渴きで根の腐食を待つのは尚辛いに違いない。それに根源を見極めなくては『私の正』は得られない、との思いに至るのだった。

物に取り突かれた様に『国立癌医療センター』の相談室を訪れた涼子は、渋谷区役所にも立ち寄つて戸籍謄本閲覧をして。その重い足取りで伯母の家がある杉並区の阿佐ヶ谷に足を向けるのだった。一階建ての立ち並ぶ閑静な住宅街の一角に、ぼづんと歯が抜けた

よう古い平屋建ての伯母の家がある。涼子は、その玄関口のチャイムを戸惑いながら押すと、伯母が驚いた表情で出迎えた。そして茶の間へ通された涼子は「伯母様っ」と言つたまま、口ひもつてしまつ。

「何を言い掛け……まさか、この前一件を蒸し返しに来たんではないでしょうねえ、厭ですよも。軽はずみなあたしの一言で静恵さんや涼子さんの心を傷つけてしまったことは、深く悔正在りんですからねえ」

「「免なさい」

涼子は伯母に心中を見透かされていたことで、一段と身の引き締まる思いが増した。

「あたしはあれ以来、涼子さんの気持ちの動搖が気になつて仕方がないでしわさ。もしかすると涼子さんが家に訪ねて来やしないかって予感もしていたんだけども、その一番懼れていたことが涼子さんの顔を見た瞬間に的中してしまつたんではと、血の気が引いたわね。ですから、もうあの話だけは勘弁してもらわないとねえ、涼子さん」「でも、私は誰なのか、一つだけ教えてもらいたいんです……もう大人の涼子ですから、伯母様にこれ以上のじ迷惑はお掛けしないと誓います」

涼子は神妙な面持ちで伯母に懇願をした。

伯母は涼子の思い詰めた様子に再び自責の念に駆られだし「本当にじ免なさいよ。誤解をどう解いたら良いのやら、あたしはなす術をしらないんだわさ。全く情けない限りなんだけども」

伯母はそう言つて項垂れた。

「伯母様っ、責めているわけではないの。だから謝らないでもらいたいわつ。それに誤解だなんてことも言わないでっ」

「でもねえ、涼子さん……」

「私の出生がどんなに卑しいものであつたとしても決して驚かないし、戸籍の『養女』とう紙人形みたいな軽い響きの一文字が私のルーツだなんてこと、とってもたえられないの」と、涼子は伯母の心を搖さぶつた。そして更に「だから、命を授けてくれることが出来る伯母様にすがるしかないわっ」と言つた。

伯母は寄り添つて坐る涼子の肩口にそつと掌を置く。その伯母の頭髪は淡い栗毛色に染めてあり、生え際の白髪がぶち猫のようにくつきりと分かれて不自然に見えている。そして、深く刻まれた頑固さの象徴でもあるかのような顔皺は康次郎と同じく似た顔立ちで、時折、口を噤んで微笑む表情には気品も覗かせる。

伯母は涼子の視線を避けるかのように立ち上がって部屋から出て行くが、再び現れた伯母の手に持つ盆上には、茶菓子と急須が載せられていた。

1 - 7

「家を出る覚悟もしているわ。このままだと藤倉家に私の依拠なんてないの」涼子がそう言つと伯母はテーブル上に盆を置き、指先で目頭を押さえて俯いた。そして再び顔を上げ、觀念したかのような眼差しを涼子に向けて「軽率だったと、あたしは何度もいうように後悔するばかりだわ。本当に弟が思つてている通りのバカなお喋り婆さんだと言うことを、今度ばかりは自覺させられたわね」

厳然となる祖母の目頭に、涼子はハンカチを取り出してあてがつた。

「眞実を知つても動搖なんてしない。いずれ早いか遅いかの違いで知ることになると思うから。話ながら両親に私からこのことを

切り出す積もりなんてないし、お願ひ伯母様つ

涼子は、執拗に伯母を説得する。

「謄本で養女だと知ったのだから、それだけで気持ちを収めた方が良いと思つんだけども、涼子さん」

「『どこの誰』と知ることの惧れはあるの。でも知りたいと思つてしまつ気持ちを押し殺す自分自身は、もっと怖いきがするの。歪んだ創造を掻き立ててしまうよりは、眞実に勝る享受はないとも思えているんです」

伯母は立ち上がりてテーブルを挟んだ涼子の真向かいに坐り直し「仕方がないわさ種を蒔いたのあたしだし、摘み取る責任もあるんだわね」そう言って暫らく眼を閉じた。そして再び赤く滲んだ眼を涼子に向けて「『フジ興産』を創設した先代の祖父が中氣を病んで永い期間入院していたけども、快復の見込みの立たない病気でもあつて、祖父が希望して自宅療養に切り替えたわね。

でも、自宅で伏せたままの療養では五歳の拓也がいて手がかかり過ぎるため、お手伝いさんを雇いいれて家に住ませたんだけど、その人には離婚歴があつてねえ、当時、三十歳前後で朝子さんという、とても優女な人だったわさ」と言い、伯母はテーブル上の急須を手にとると、涼子に一つの湯飲み茶碗を手に握らせて茶を淹れた。さらに「甲斐甲斐しく身の回りの世話をしてくれて祖父は大変な気に入りようで、何かに付けて『朝子朝子と呼び捨てにして甘えながら半年が過ぎる頃に『結婚する積もりです』と言い出された祖父は、とても落胆したんだわね」

テーブル上に置かれている伯母の湯飲み茶碗に涼子は急須で茶を注いで伯母の掌に握らせると、伯母は大きく息を吸い込んで溜息交じりに吐き出した。そして掌に握る湯飲み茶碗の淵を思案顔で指先

でなぞるのだった。

1 - 8

「静恵さんも康次郎が代表取締役の『フジ興産』に勤める手筈になつていたことで残念ではあつたけど、強引に引き留める訳にもいかず、藤倉家として祝福をしてあげようということにはなつたわね」と言つた。

涼子も一度も口にしない湯飲み茶碗をテーブル上に置き、伯母の肩に頭を擡げかけさせて、伯母の片手を強く握り締めだした。

「朝子さんは、とりあえず秋の結婚間近まで祖父の面倒を見てくれるといふことに落ち着きはしたんだけども、日が経つにつれて朝子さんのお腹が大きく膨らむのが目立つてきていたんだわ」と言う伯母の話では、静恵が朝子を産婦人科病院に連れて行き妊娠と診断されたが、出産の予定日が間近に迫る秋の結婚期と重なるはずの朝子は、出産や結婚の準備はあるか『結婚する』と言つていた相手の男性にさえ、妊娠の報告すらしていなかった。それで仕方なく藤倉家が出産の準備だけは整えてやつてしまひたが、朝子からは何の説明も結婚をするという男性からの連絡もなさそうだったから、まさか祖父が何てバカな憶測を冗談にも家族でしたが、そんなことは月足らずであり得ることではないし、すぐに祖父の容疑は晴れて秘かに一笑に付しもした。

そしてある日、朝子にその男性のことを思い切つて訊いたところ、連絡場所も男性の名前とて答えようとはしなかつた。きっと、複雑な事情があるのだろうと思い直した家族は、仕方なく腫れ物にでも触れる思いで気遣いだしていた。

それから間もなく臨月を迎えてしまったことで、静恵は近くの産婦

人科医院に朝子を連れて行き出産をさせたのだが、その出産直後に下腹部からの出血が止まらず急遽、大学病院に移送されて治療を施された。だが、甲斐もなく朝子は息を引き取った」とのことだった。

「母なのね」涼子は一言つぶやくと、嗚咽しだす伯母の横顔に乾いた目線を当てた。伯母の口は再び開かれて「気の毒に逝ってしまった朝子さんの身許を調べはしたんだけども、履歴書に記載されてた住所は、以前に男性と同棲していた所だったらしいことが判つたのよ。でも、それ以上のことは」と言つた。

涼子は、呆然自失に陥つた。

「だから朝子さんを藤倉家で手厚く弔ふてあげて、警察に委ねたわ。そうしたらばなんと、一週間足らずで祖父も朝子さんの後を追うようにな、他界してしまつたじゃないのさ」伯母は、涙でそう話すのだった。

1 - 9

「…………」

涼子は写真一つ見たこともない生母ではあるが、微笑みをつゝすらと思い描いて合掌をした。

「祖父が亡くなる間際に『生まれた児は家の児として育てられないか』って、何度も弟夫婦に懇願しながら生涯を閉じてしまったわ。だけど、あたしが古賀と再婚して藤倉家を再び出たのは、その翌年だつたのよ」伯母はそう言いながら皺を寄せた目頭に、そつと指先を添える。

涼子は部屋の中から廊下を隔てた透明ガラス戸越しに、猫の額ほどの庭とは対照的な、幹の太いモクレン樹に視線を移す。そして、軒下まで這う枝の紅紫色の六弁花が微風に揺らされて、軒に擦れ散

る重層を見て取つた。

伯母は雨泣し眼を腫らしているが、涼子の瞳は乾いたままだつた。やがて重く沈んだ空氣の中で涙を涸した伯母は乱れた染め髪を丹念に指先で梳き整えながら、壁に掛けられている先だつた夫の遺影に視線を投げた。そして、徐に立ち上がって襖の開け立てられていた部屋続きの仏間に入つて行き、仏壇前に力なく坐り込むと線香を点じて合掌をしだすのだった。

果然と伯母の背に視線を当て続けていた涼子に伯母は「静恵さんは拓也と涼子を分け隔てなく愛情を注いでいたし、それで涼子さんが立派に成長されたんだわさ。そんなことで、余りにも自然に時が経つものだから、あたしの意識はどこかへ飛んでしまつてたわさ」伯母はそう言うと傍らの箱の中からティッシュ・ペーパーを摘みだし、「グヒィー」と大きな鼻音をたててかみだした。さらには「といえ不見識な結果を招いてしまい、両親や涼子さんには深く詫びますよ。でもねえ、今では涼子さん判断力を十分に備えた立派な大学生になられたし、状況は浸潤と良い方向に理解を深めて行ってくれると信じているわさ」と言つた。

「解つたわ伯母様。本当に困らせてご免なさいねつ。兄の問題を抱えている父母に、私のことでも悲しませてしまつよつなこと決してしない積もりだわつ」

涼子はそう言うものの、払拭出来ない裏腹な思いを抱え込んでいた。

康次郎から病名の真実を伝えられても動搖する表情は見せないでいる拓也だが、「自宅療養に切り替えてくれよ」と強く懇願をしたこ

ともあり、もはや効果の期待出来ないリハビリよりも、退院させて家族と共に暮らされた方がいいのかも知れないとの思いに至った康次郎は、拓也の望みを叶えることにした。涼子は、そんな自宅療養に切り替えていた拓也の精氣の失せた姿を見るにつけて心が痛む。気分転換に拓也を車椅子に乗せて公園にでも連れだしたいのだが、拓也は頑なに拒絶するばかりであった。

そんなある日、涼子は一計をめぐらせて学友の咲子を残して数時間、二人っきりにさせた。そして、そのことが功を奏したかのように、翌日の拓也は食欲旺盛で、笑顔まで見せていた。

康次郎はその日の夕餉を囮む涼子に向かい「拓也が笑顔を取り戻してくれたのは何よりだ。涼子のお陰だよ。それで咲子さんにも涼子の方からお礼を言つておいでくれんかね」と言った。

「放つて置かれている兄さんを見てはいられなかつただけなのよ。だからつい咲子さんに悲観的なことを話してしまつたんだけども、そうしたら咲子さん『元気づけるには恋人の存在が一番よっ。でもガール・フレンドでもいいんだけど、異性の神通力に縋るのがいいと思うわよ』何て言つてたのよ」

「頼らざるものは異性の神通力か、よく解る」康次郎はそう言つた後で静恵の反応が気になつて、意識的に田線を逸らした。

「『彼女がないなら、私が代役しようかしら』なんて言つてくれたから、それで気軽に来てもたつただけなのよ。だから親は無関心を装つていた方が兄にはいいと思うんだけど」と涼子が話す。

「そんなんもんかね。では親は干渉しないでおこう。だが涼子『拓也が放つて置かれている』などと言つたが、そんな人聞きの悪いことだけは言わんでくれ」康次郎の言葉に傍らの静恵も口を挟んできて「そうよ、大事な息子を放つておく親が何処にいるのですか」と、

眉間に青筋を立てて言つ。

そして更に「私が仕事を辞めているのも、身の回りの世話をするためじやないの。何とか精神的にも支えになれたらと、努力をしてきたんですよ。だけど拓也はあの通り意固地になつていてるばかりじゃないの。そんなことぐらいあなたにも解つていたはずでしょう」そうヒステリックな口調で涼子に囁み付いた。

「ここの何かと刺々しくなつてしまふ家族だが、これからは拓也のためにも努めて明るく振舞おうじやないかね」

康次郎は涼子に注意をした一言で険悪な雰囲気になつてしまつたことを悔い、臆しがちに鼻白んでそう言つた。

「でも、そういう父さん一番暗い顔をしているわ」

1 - 1 - 1

「ああ、そつなのかね。自分じゃ少しも判らんが、これから明るく振舞う努力はしよう」と言う康次郎は、顔を擡げて全面にある大きな食器戸棚のガラス面に「」の顔を映し見て、さらに「涼子、干渉する訳ではないが、咲子さんには、これからも繁く家に来てもらえるとありがたいのだが」とも言つた。

「咲子さんも卒論に取り掛かっている大事な時期よ。だから、どうかしら？でも、兄が寂しがっているからもう一度だけでも頼んでみるわ」

「今の拓也には、異性からの励ましが一番効果のあるリハビリだろうから」と言う康次郎自身、咲子に過度な期待をしてしまうジレンマもあるが、さりとて他に効果の上がる治療方法がある訳でなし、そう願わざるを得なかつた。

「そのうち兄さん、心が浮き立つて車椅子で外に出たいと思つようになるわよ、きっと。そうなれば毎日でも車椅子を押して兄さんを外に連れ出す役目は私がするんだけど」涼子がそう言つと、透かさず康次郎は「それはせんでいい。

涼子も卒論や就職のことと、手一杯のはずだらう。今後のケアのことは、私と静恵で何とかする積もりでいるし、涼子は自分のことになると専念してくれさえすればいい」

康次郎の胸中、兄妹として仲睦まじいのは好ましいのだが、血縁がないことゆえに異性への本能に目覚めて恋心へ発展でもされてしまつたら大変と、病床に着いている拓也の状況下においてもなお、そう払拭しきれない複雑な危惧を抱き持つていた。

涼子が拓也の部屋に入つてゆくと、ベッドに横たえた拓也が涼子に笑顔を向けた。

「兄さんは今、咲子さんのこと思い浮かべていたようね」

「何、言つてんだい」

「だつて、嬉しそうな顔していたわ」

「バカもの。冷やかすな。死神に取り付かれていて嬉しがることなんて、ある訳ねえだろ。でもなつ、正直に言つと、おかしな話をする愉快な咲子さんだつてことは、チヨツ・ピリだけど思ひだしてはいたよ」

「おかしな話つて?。咲子さんはジョークなんて言わないし、だから男性に面白がられるなんて想像できないわよ。でも同性には見せない部分つてあるのかなあ。ウフフ」

「咲子さんは話術で酔わせるのが得意のようだった」

「やうなの」

「一時でも死神を俺から遠ざけて安らぎを覚えさせてくれたんだから、感謝はしているよ。願わくば、もう一度だけでも来てくれないかつて思つてんだ」

拓也は壁に掛けられているラガーマンだった頃の、自分の凛々しい写真に視線を向けながら云つ。

1 - 12

「女つて、感謝の気持ちで接しられたって少しも嬉しくはないものよ。『ステキな君に逢いたい、好きだ』って、率直に言われた方が喜ぶものなのよ。もし咲子さんが来てくれたなら、車椅子を押してもらつて公園にでも出掛けみたらどう?」と涼子は嫉妬心を抑えて言つた。

「そりや駄目だ。何時も言つてゐるだらう、こんな姿を晒し廻りたくないってさ。それに好きだなんて丸太のように寝たきりの俺から言われたら、咲子さんばかりか世の女性たちだって、身の毛もよだつに違ひないよ」

「なに卑下してんの、バカねえ。人柄に好意を抱く人は沢山いるわ。自信がなくて言えないのなら『兄さんが咲子さん好きで逢いたい』と言つていたと、私が言つちやうわよっ」

投げやりに涼子は言つものの、拓也が一方的ながら咲子を本気で好きになつてしまつたらどうしよう、などと更に嫉妬心が増した。

「こんな死に体同然の俺にだよ、いつまでも咲子さが付き合つてくれるとは思つてないさ。けどなつ、逢いたいと思つているのは本心なんだ。だから涼子が咲子さんに何といつて誘つてくれても構わんさ」と言つづが、涼子にやきもちを焼かせようと揺さぶつて、愛を確かめようとする歯痒さと自己嫌悪のジレンマを抱え持つていた拓やは、幼い頃より慕つて纏わりつく妹とは仲睦まじかつたが、ある時

を境にして妹ではなく恋心を覚え、異性として捉える感情の変化を自覚した。

「兄さん解ったわ。それじゃ咲子さんに話してみるわよ。だから死に体だなんて愚かなことは、絶対に言わないでよ」

「…………」

「昨日、落合（拓也の友人）さんが見舞いに来てくれたでしょう、『脊髄炎でもリハビリで快復した親戚がいる』って話してくれたのを、私も側で聴いていて本当に希望が持てたんだから」

「氣休めで言つたんだろう」

「治すつて自分自身に言い聞かせて努力さえすれば、きっと治せるわよ」

「そんな慰め言つなつて。ピクリともしないカカシみたいなこの手脚をさ、齒でばたばたさせられたつて口ボットじゃあるまいし、勝手に動き出しちゃはずないじやないか。情けないけどこれが現実なんだ」「

1 - 13

「弱気な兄さんつて、大嫌いだわ」

「今の俺、叶いもしない夢など見るより現実に妥協して生きようつて思つてんだ。その方が、なんだか気持ちの落ち込みがすくないみたいだし、だから弱気なんかじゃないさ」

「…………」

涼子は拓也の言葉が空しく響きもするが、その言葉に多少の安堵感が広がつた。

「そんなことよつと、落合は涼子を好きだと思つていたんじゃないのかなあ。俺にはそう感じ取れたんだ。涼子は落合をどう思つたよつ？」拓也は突然話題を変えて、そう言つた。

「兄さんが健康体になるのを願っているだけよ。だから、他の事など煩わしくって、何んにも考えられないわっ」

涼子は拓也の冗談めかしの言葉に、はらだたしかど、くすぐったさを抱いてしまう。

「そんなんじゃないのよ。好きも嫌いも何の感情も抱かなかつたんだから。それよりも兄さん……」

涼子は話題を変えたい衝動に駆られ、自分が養女だということを知っていたのかどうかを訊こうとしたのだが、言葉を飲み込んだ。

「言いかけたら言えよ」

「……でも、もう行くわっ。母さんが来るとギヤギヤと煩いし。咲子さんの件は任しとしてつ」 そう言つて部屋を出た涼子は、自分の部屋に戻つてベッドの端にチョコソンと腰かけながら、以前、警察を訪ねて生母の住所が四国だと訊き出していたその地へ一度は行つて、生母の靈を弔つべきではないかといふことを、考えだしていた。

涼子は咲子を伴なつて家に戻つてきた。そして拓也の部屋に行き「また咲子さんに家に来てもらえたわ。モンブラン・ケーキを買つてきたし、母は買い物か何かで出掛けているみたいだから、咲子さんに食べさせてもらつてねつ、私は父がゴルフに行つて留守だから、書斎を借りて卒論を仕上げているわっ」

そう言つ涼子は咲子に対し嫉妬心が無い訳ではなかつたが、親友である咲子以外の女性など、兄の相手として考えられないことだつた。

「じゃ咲子さん、気兼ねしないで兄さんの話しだけになつてあげて」 涼子は咲子にそう言つて、ケーキの包みを咲子に手渡した。そしてさらに「その中に飲み物が入つていてるから後は勝手にお願いしちやうわよつ、咲子さん」とベットの傍らの小さな冷蔵庫を指さして

言い、部屋を出た。

1 - 14

涼子は氣の滅入る拓也の氣持ちを慮るが故に、もやもやとした複雑な氣持ちを抑えて氣を利かした積もりになつっていた。そして未完成な卒業論文の作成に取り掛かつて一時間ほどが経過した頃に、静恵が家に戻った気配を感じ取つていた。だが日曜日の今日は「兄の話しぶ手に咲子さんが家にきてくれる」と昨日のうちに静恵には話してあつたこともあり、特別に慌てる「ことなど、書斎にこもつたままでいた。

するとその直後、二階辺りから静恵の甲高いヒステリックな声が聴こえ出してきた。涼子は急いで一階に駆け上がりみると、静恵が拓也の部屋で咲子の背に向かつて罵声を浴びせているではないか。予想だにしない事態に唖然とする涼子だが「止めてよ母さん。せつかく咲子さんに来てもらつたのに、なぜ怒るのよっ」

涼子は、そう静恵を制止した。

「涼子は初めつから汚らわしい女だと判つていたんでしよう」

静恵は、怒りの矛先を涼子に向けた。

「なんてことを言うのよ、母さん。咲子は私のクラスメイトだわ。父も、また来て欲しごつて言つたじゃないの。咲子さんに失礼だわよつ」

涼子はそう言つて、充血した怒りの眼を静恵に突き刺した。

「この女（咲子）は拓也の不自由な体の上に卑猥な格好で跨つたりしてさ、淫らな行為をしているじゃないの」静恵は怒りの言葉を吐き捨てた。

背中を向けたままで乱れた着衣の見縫いをする咲子に視線を移し

た涼子は、訳の判らぬ激情がメラメラと沸き起る。

「本当なの咲子……体の不自由な兄を弄ぶなんて、最低よ。」

涼子は咲子に囁みついた。

「ステキな拓也さんが寝たつきりなんて、前に来た時もかわいそうでみていられなかつたのよ。Hビデオの一つも見せてはやらないみたいで同情したし、それに好きになつてしまつたのかもねつ。でも涼子、ご免。私、帰るわねつ」

快活な性格の咲子が長い茶髪を指先で搔き揚げながらそつ言い残し、悪びれた様子もなく藤倉家から出て行つた。

一年前に学友たちの間で「咲子は風俗嬢のアルバイトをしている」という噂が飛び交つたことがある。当時は不確実な情報だつたこともあり、友人の咲子を信じて疑いなどは抱かなかつたことを思い出していた涼子だが、破廉恥な行為をした咲子に対し、次第に拓也を汚されたと思う怒りに変わつていた。

1 - 15

その日の夜に、静恵から事情を聞かされた康次郎から当然の如く涼子は雷を落とされた。覚悟はしていたものの、余りにも凄い軒まくに涼子は耐え兼ねて、そうそうに一階に駆け上がって自室に籠もつてしまつっていた。そして化粧鏡に顔を映しこむその胸中には、藤倉と言う姓が虚しく何度もこだました。

涼子は徐にロング・ヘアを丁寧にブラッシングしだし、そして唇に薄紅をさすと隣室の拓也の部屋にそつと立ち入ると、ベッドに横たわる拓也は、涼子に虚ろな眼差しを当ててきた。

「私、咲子さんがあんな人だとは知らなかつたのよ。でも本当にご免なさい」

「そんなことはいいんだ。俺が頼んで呼んでもらつたんだから、気にしないでくれ」

「私、四国へ旅にでて頭を冷やして来ようと思つてゐる」

「それで口紅を塗りたくる練習したんかよ。涼子の口紅をさした顔は、俺、初めて見たぞ」

「似合わないと、言いたいんでしよう」

「そんなこと言つてないだらうが

眩しげに涼子の端整な顔立ちに視線を向けて言う拓也は、涼子が好きでたまらなかつた。だが「もはや叶わぬ遠い存在になつてしまつたのか」と思うのだった。

「四国へは明日行く積もりだわつ」

「ふうん……さつき、涼子が悪くないのに親父はどなつていてただろつ。許せな涼子。四国に旅をするんなら、存分に憂さ晴らしをして来いよ」

「ちょっと調べ物があつての旅よ。だから憂さ晴らしする時間も気持ちのゆとりもないわよ、きっと」

「調べ物……ああ、卒論に関係した旅つてことかい」

「…………」

涼子は好きだと言つていのだけを打ち明けるタイミングを失つて扉を背に突つ立つたまま、拓也の視線を外せない膠着した心情に陥つてしまつていた。

拓也の「どうしたよ」と訊きただす言葉に我を取り戻す涼子だが、言葉を残さぬまま部屋から出て行つた。

秩序だとか道義心だとか、そんな理性には愛を破壊する力はないけれど、思いを遂げる勇気は断ち切るよりも百倍いるわと涼子は自室で机の椅子に腰掛けながら、そう悶々と考えこんでいた。

涼子は、徳島県阿南市に眠る生母（朝子）の地を訪れていた。

「西の国（韓国）が祖國」と言つ祖母とともに幽邃の森を背にした墓前に跪いて献花をし、時を忘れて嗚咽で合掌をした。そして肩を並べて山道に佇み蒼海の彼方を俯瞰していた祖母が「第一次大戦なか二十歳で日本に渡ってきた」と語つたが、その動機の多くは語りたがらない。涼子は、海の地平線に投げて細める目頭の滲みから、祖母の境涯を汲み取る思いを抱くのだった。

祖母が話してくれたのは、二十九歳の時に日本人男性と結婚をして、朝子（涼子の生母）を身籠つた。そして朝子が十六歳になつたときに父が他界して、朝子は祖母の生計を助けるために上京をしたという。町工場に就職をした朝子は、工場の寮に住みながら十年の歳月が流れたある日、工場の主任からプロポーズを受けたことで、結婚を前提に同棲生活を嘗みだした。がしかし、相手男性の両親に結婚を強く反対されたこともあり、二人の仲は次第に色褪せてゆき、挙句は破局を迎えてしまつっていた。

約束通り、結婚に至るまでもなく四年余りの同棲生活にピリオドを打つた朝子だが、傷心を抱えたまま藤倉家に就職をしたという。

その後のことは既に古賀の伯母から聽かされていた涼子だが、数奇な運命を引き摺る祖母を守れなかつた母の無念さが判るにつれて、胸の奥底に悲しみが蓄積されだしていた。

これからは母の地で生きて、祖母と癒しの生活をしなければ母は浮かばれないのでは……それに養女だと知つことにより、より一層、鮮明に拓也を異性としてとらえだした感情の芽を摘んでしまい、藤倉家から立ち去るべきではないかと涼子は、そんな思いに駆

られだしていた。

祖母の僅かな畑の一隅には古賀家にもあつた痩せたモクレン樹が一本だけあって、その畑から橋港と駅舎を見下ろすことができた。祖母は「生まれ育つた祖国の家の庭先にもあつた樹で「モンヤン」ということを教えてくれた。その樹木の根元に涼子は腰を据え、眼下の橋港の水面に視線を落とす。

虐げられた悲運を背負う祖母には、アガペー（神の愛）の加護が必要だ。せめて残り僅かな大学ではあるけれど、中退しても私の小さな愛であれ、鍼を持つ手も覚束ない年老いた独り身の明日が心配だから、祖母を支えてゆくべきだ。兄は両親の愛で包み込まれているのだし、それに拓也への思いを断つことができるかも知れない。と、涼子は祖母と共に癒しの人生を送りうと決意を固めてしまう。

育ての両親のこと。養女であること。兄への愛に田代覚めてしまったこと。咲子が不祥事を引き起こしてしまったこと。それに四国に住む祖母のことなどが千々に絡みつきだす涼子だが、敢えていま、身の振り方を問われていると思うのだった。

2 - 2

瀬戸から藤倉家に戻つて来た涼子は、育ての両親や拓也を裏切ることに繋がつてしまうことへの葛籠で、胸が締め付けられた。だが決断の鈍ることを恐れて三日後に、涼子は両親の承諾も拓也にも胸中を明かさぬまま再び身の回りの僅かな手荷物だけを持ち、秘かに藤倉家に別れを告げて四国に舞い戻つてしまっていた。

涼子は祖母の許から怒っているであろう康次郎と静恵に宛てて、胸中を認めた手紙を送付した。

「これまで何度も考え直してみたことですけれど、生母の心残りで  
しう祖母の存在を知り、私の手で守るのが当然ではないかと思いま  
ました。

それで今、お別れの手紙をかいているのです。でも重大なことです  
し、手紙で事を済まそなだと考えたわけではありませんけれど、  
今はどうしても打ち明ける勇気がないのです。ですから少し時を経  
たならば必ず父母の前に跪き、かへと許しを請うことが出来ると思います。  
けれども許されるはずもなく、かへと赫怒は避けられないことは承知し  
ています。

家族とのお別れは忍び難いのですが、血を分けた数奇な生母は、  
生涯で祖母を守れなかつた悔いを残して他界したと思っていますか  
ら、私が代わつて祖母を守つていく宿命にあるのだと思つています。  
鬱悶の日々を送るより、瀬戸の地で祖母と心を一にした癒しの生活  
をすることが、何よりの供養だと考えました。とは言え涼子の方  
的な決断で育ててくれた父母を裏切る行為には違いないことですし、  
深くお詫びをします。

きっと新たな深い業を背負つてしまつことににはなるのでしょうかけれ  
ども、薄皮を一枚一枚剥ぐように、心を清める修業道を心がけても  
まいります。温もりのある家庭で何一つ不自由なく育まれた私は幸  
せでした。けれども幸せで有ればあるほど潜む罪の意識に噴まれて  
いたのです。今は分別の付く年齢に達していますから、決意に対し  
て後悔などは致しません。残り僅かな大学も逸る気持ちを押さえる  
ことができずになりますから、間近な卒業ではありますが断念せざる  
を得ないと考えました。

大学よりも異国の方で独り取り残されている年老いた祖母が、と  
ても不憫でなりません。

兄のことはいろいろと気懸かりですが、専門の介護婦さんが家に来てケアをしてくれることになったこともあります。リハビリも順調に進むと信じて決心したのです。私の畏友に打ち明けてみても、やはり家は出るべきではないと、諭されました。

でも口を重ねるうち次第にあざる気持ちが激しくなって、家では身の置き処さえ儘ならぬ境地に陥っていたのです。もう仕方がありません。父や母にとつては痴れ痴れしく思うことでじょうけれど、許して下さい。両親への感謝の気持ちは言葉に尽くせませんが、どうか察して貰いたいのです。兄の快復は、瀬戸内の清らかなコバルト・ブルーに染めたこの海と澄み渡る天に願いを込めて、祖母と一人で毎日祈り続けてまいります。

2 - 3

「このことは依拠を求めた涼子の独断行動ですし、祖母を恨まないで欲しいのです。育てられた恩を忘れる涼子ではありませんから、気持ちの整理が出来るまでは、手紙にてお許し下さい。

呉れ呉れも父と母はお体を大切に。そして涼子の分まで兄を大切にと願っています。

追伸。電話は自分の間、祖母の心中が搔き乱れるのを憚れて電話は繋がらない様にして置きますので、悪く思わないでください。父、母へ。涼子より

涼子は、僅かな農地で野良仕事をする老いたりぱり祖母の姿に涙が零れた。

「婆ちゃん、私のモンペ姿見て、どう、似合つかしら？」

涼子は涙をこらえてそう言つて、祖母の目前に立ちはだかつて燥いで見せた。すると無口な祖母は眩しそうに目を細め「うんうん」

と顔を上下に振つて限りなく無表情ではあるものの、觀世音菩薩のような言い知れぬ温もりを感じる喜びの表現は、過去の虐げられた者同士の抵抗手段として備わつた、内に秘めた会話術なのかも知れぬ。

涼子は大地に抱かれたような安らぎ感と、瀬戸海の珠玉に触れる思いに浸つていた。

涼子は一日田に、慣れない手付きで祖母の野良仕事を手伝つていった。ふと見上げると、畦道を自転車に跨つた郵便配達人が近づいてきて「婆っちゃん、家の庭先に寄さいたでよ」そう大声で言いながら、去つてゆく。

「誰やな?」一言呟く祖母は、鍵から離した手を腰に当てがうと、曲がった背を伸ばすように、多少くの字ぎみに突つ立つた。

「婆ちゃん、私が家に戻つて見るわ」涼子はそう言って、泥の付いたモンペ姿のまま三五百メートル程の畦道を駆け出した。

そして開放された家の縁側に腰を下ろして怒りの視線を突き刺す静恵の姿が視界に飛び込だ涼子は、愕然とする。静恵は、息を切らして面前に立つモンペ姿の涼子を呆れ顔の眼差しで見据えると、頭の天辺から足許まで冷めた目線で嘗め下ろし「あなた、気は確かなの。お父様は怒り狂つて私に八つ当たりして来るし、遣り切れないじゃないの。お父様は仕事の都合で一緒にこられなかつたんだけど『涼子の首に綱を掛けてでも必ず連れ戻せ』って息巻くんだわ。

『さもなくば今度は俺が行き、唆しているに違いない婆さんを懲らしめて、涼子を連れ戻す』だなんて、そりや大騒ぎだつたわよ。それに拓也のことや会社での問題も重なつて『気が変になつちまつ』だなんてことも言つたわよ

「『免なさい』」と涼子は謝つた。

「涼子が婆さんから『免なさい』とを聽かされて洗脳されたのかは知らないんだけども、涼子は既に藤倉ファミリーなんですよ。ですから惑わされて人生を台無しにしてしまうなんてこと、親が黙つて見過ごしている訳にはいかないでしょ?」そつ静恵はけんもほろろに捲くし立てるのだった。

「本当に『免なさい』。でも皎潔<sup>きよしづけ</sup>な祖母なのよ。だから『唆された』とか『惑わされている』だなんてこと、言わないでもらいたいわ。昨日、私を繫ぎ留めるどころか暮れ泥む西空を見上げていた祖母が『親が心配するで帰へつたらよかなあ』なんて、まるで外で遊ぶ幼児にでも聽かせるように私に囁つたんだから」

「『免なさい』、それが本心なのよ。届<sup>たま</sup>られることを『迷惑』だと思つていても涼子が鈍感だから、そんな能天氣なことを言つていられるんだわよ!」

「ともかく母さん、今、お茶を淹れるから部屋に上がりよ」そう言いながら土間の中に入ろうとする涼子に向か<sup>い</sup>、「お茶など要らな<sup>い</sup>わよ。それよりも早く帰る尺度をしたらどうなの?」

「この地に眠る産みの母だつて、そんな祖母のことを心残りで成仏できないでいるに違ひないし、今の祖母には神の大きな愛の加護が必要だと思つてるの。お願ひだから、肉親の苦境を見過<sup>ご</sup>していらっしゃないこと解つて欲しいの」

「解らないわよ、そんなこと。第一、涼子に何が出来るつての?」「頼りない私なんだけど、産みの母が祖母を託<sup>とき</sup>すと私をこの地に引き寄せたんじゃなかつて、今ではそう感じて<sup>いる</sup>の」

静恵に理解を求める涼子だが、心中にはもう一つ、秘かに拓也への熱い思いも絶とうといつ願いが込められていた。

静恵は、縁側に茫然自失で腰を据えたまま時を流し続けていたのだが、「肉親ねえ」と胸に突き刺さったのだろう、そんな言葉を溜息混じりに呟いた。そして唇を硬く噛み締めるとやお立ち上がり、無言で立ち去り出した。

「母さん、『免なさい』そんな涼子の一言が、静恵の背を追つた。煙に戻った涼子に祖母が「たれやつた」と涼子に顔を向げずに、ぼそりと訊いた。

「誰でもなかつたわよ」涼子は何食わぬ顔で言い、再び鍔を手に握る。

口を噤んだままの祖母が時折手を休めて愛しい涼子に向ける眼差しは、全てを見通しているかのようだった。

「母（朝子）が婆ちゃんを祖国に連れて行きたかったんではないかしら。私が代わりに必ず果たすわ、きっと。だから楽しみにしていてねっ」

2 - 5

「そこにあるモンヤンに家族が宿るみてえに想い出しがで、今では何もねえ祖国にや帰らんが、寂しいこたあねえ」

諦めてしまったかのような言い方で花のない木蓮樹を仰ぎ見る祖母の背が、懐郷の念やみ難しと涼子の眼には映るのだつた。

「私にとつても半分は祖国なのよつ。婆ちゃんを必ず連れて行くわ」祖母は首に掛けていた手拭を外し取り、泥に塗れた皺顔と掌を拭いだす。そして眼下に見える橋港の遙か沖合いを俯瞰しだした祖母

は、首に掛けていた紐の先に括った小袋を取り出して、掌に固く握り締めるのだった。

「婆ちゃん、それは？」涼子は訝しげに顔を祖母の掌に近づけて、そう訊いた。

「家族三人の魂やで」

「まあ、気味悪い……」

涼子は、仰け反るように顔を遠ざけた。

「おらの守りカミだが、なんも気味悪かねえ」

「神様なのっ？」

「先祖の髪の毛へえつちょる」

「矢張り気持ち悪い」涼子は、再び眉を顰めて言った。

「この袋にや長げえ」と守られて暮らしてきとつたで

「……」

「親も兄さも、この袋の中や。それに朝子の墓もこの地にあるで、もう離れるこたあできねえ。それにほれ、今じやこいつして孫の涼子もいるで」

「それなら、母のお墓と先祖は一緒にしたらいいのに？」

「日本人の血いへえりよる朝子だけえ、恨んで死んだ家族とは別や」

「……そうだつたんだ、婆ちゃん。じゃ、なおさら國へ帰つてお墓を造りうよ」

「今じや、家もねえ処に墓なんていらねえ。もう、この地を離れるこたあ、できねえ」祖母は目を細めて言つた後、口を噤んでしまつ。

静恵を引き連れて祖母の家を訪れた康次郎は、血の気が失せて苦々しく眉を吊り上げていた。涼子は、そんな康次郎の表情に他人を見る思いを初めて抱く。

康次郎は土間から荒々しく部屋に上がり込み、そしてハ畳部屋の中央に置かれている小さな卓袱台の前に歩みよると、畳の上にどつかと腰を据えだした。

そして静恵もその後に従つよう並んで坐る。

涼子は早々に座布団を康次郎と静恵に差し出して自らも卓袱台を囲んで坐るが、祖母だけは土間の隅にある台所で茶の支度を長々としているようで、なかなか部屋には上がつて来ようとはしない。

康次郎は苦々しく口に銜えていたパイプを外し「お茶などいらんよ婆さん、早く此処に来て坐ってくれんかね」と土間に居る祖母に顔を向け、強い口調で言った。

腰を丸めた祖母が怖ず怖ずと土間から部屋に上がり込んで来て、少し離れた位置に小さな体をさらりと小さく丸め、視線を逸らすかのように斜に坐る。

2 - 6

「私が責められるのは構わないんだけど、でも婆ちゃんは何にも責められるようなことしていいんだから、責めないでっ」

涼子は僅かな静寂を衝き、康次郎懇願をする。そんな涼子の言葉を無視するかのように、康次郎の苛立ちの表情は顕になつた。そして「涼子を誑たぶらかすのも大概にしてくれ。今さら何が欲しいというのかね」と祖母を責め出した。

「止めてつたら父さん、私の婆ちゃんなのに酷すぎるわよ」涼子は居た堪らずに康次郎にそう食い下がる。

「涼子は黙りなさい」

一言も言葉を発しないでいた傍らの静恵だが、康次郎に同調して口を挟んできた。

「出生の真実を知ったことで、これから相応しい人生を選択して歩もうと決意したことだから、婆ちゃんを責めるなんでお門違いだわ」涼子は自分の行動で祖母をまとして不幸に陥れてしまつたと身を切られる思いに駆られ、静恵の言葉に迷ひつた。

「出生のこと隠し通していたのは、涼子のためだと判断していたからなんだ。それに今、不幸を背負おうとしている涼子のこうした状況が現実化してしまつことを何より惧れ、話す機会を逸してしまつていたんだよ」

「そのことは、恨んでないし感謝をしているわ」

「でも、そういうひじいてるひけに涼子から恨みを買つてしまつたんだろう、じついう最悪の仕打ちをされたんだから。本当に情けない限りだが、でも恩を忘れてしまうような犬以下の育て方をした積もりはないし、なにも、こんな踏みにじり方をしなくつてもいいではないのかね」

「感謝も尊敬もしているわ。それなのに踏みにじつただなんて」そう言つた後に虚しさが込み上げる涼子だが、育ての両親にそんなふうに思われてしまつるのは無理からぬ道理だとは、理解はできていた。だが、生前の生母の置かれた苦境には心が痛み、それに加えて満ち足りた境遇に浸かつて育てられた虧盈の隔たりに、己を卑しんだ。

「だったら『誑かされている』だけなんだから、あえて不幸を背負うことはないだろう」康次郎はそう言つた。

「『誑かされている』だなんて醜いことを言つて、婆ちゃんを仇のように苛め立てるのは、止めてよ」涼子は我慢ならずに憤つた。

「哀れみで誘つていると、判断できるから言つんだよ」

「どうしても婆ちゃんを責めるなら、涼子はもう一度とお父さんとは思わないし、呼びませんから」

2 - 7

涼子は康次郎の言葉を遮って言つもの、自分の言葉を心で詫びた。だが、溢れでる涙の濡れた眼光は康次郎の狼狽えた横顔を射っていた。傍らで項垂れる祖母の一段と小さく丸めた背に視線を置き直し、心の痛みを倍加させてしまった自責の念に駆られだしていた。

康次郎は父として拒絶され掛け、痛恨の遣る瀬無い虚しさに打ち拉がれていたのだが、そんな弱気の気持ちを打ち消すかのように毅然とした表情を作つてみせ、「時期を改めるとするが、何が何でも連れ戻すことには変わりはないよ。涼子は一日も早く自縛を解かんといかんのだ」

康次郎はそう強気な言葉を残し、静恵を伴つて再び山を下つて行つた。

「私が来た事で、婆ちゃんを悲しませる結果になつてしまつたわっ。私は母（朝子）の眠る地を離れたくはないし、生まれ変わりたいと思つて來たんだわ」と言う涼子は、祖母の顔に刻まれた深い皺に壮烈なる半生を感じて見入り、幾多の艱難辛苦にも耐え忍んできた祖母のこと、きっと心を鎮めてくれるに違いないと願いを込めるのだった。

数日後、康次郎から「数ヶ月残すだけになつている学校だけは卒業したらどうなんだ?。その後は涼子の生き方を尊重するから、帰つて来ては……」

涼子の許に、そんな手紙が届く。

涼子は康次郎の条件を呑むことで、藤倉家族とも擬を残さず円満に祖母と暮らせるようになるのなら、こんな喜ばしいことはないと思つのだった。そして祖母と寄り添つて仄暮れかけていた縁側に坐り込んで手紙を読み聴かせると、祖母は顔中の皺を寄せ集めたような、笑顔を作つて見せた。

2 - 8

「稻刈りは済ませてあるし、この前家に来た農協の安西さんが『後の作業は手伝つてあげる』と言つてくれたから、私、安心して藤倉家に戻ることができるわよ。そう決まれば秋の授業が始まっていることだから、明日にでも東京に行くわね。お正月休みには戻つて来たいけど、父の気分を損ねてしまうかも知れないし、多分無理だと思うのよ。でも必ず七ヶ月後には卒業して帰つて来られるんだから、それまでは寂しくつても我慢していくねつ。婆ちゃん」

「なあに、永げえこと独りやつたがね」

「強がりでもいいの。戻る時に祖国へ一緒にゆく旅券は用意してくれるから、楽しみにしていてねつ」涼子はそう言つて傍らの祖母に視線を当てた。が、祖母は柱に凭れ掛かった状態で夕日を皺顔に一杯浴びながら、既に居眠りをしだしていた。

住み慣れた藤倉家の敷居が高いと感じる涼子だが、説教や叱責は覚悟の上で余所余所しく玄関を開け入つた。すると、玄関には康次郎と静恵が以外にも笑顔を見せながら出迎えて「お帰り」と、それぞれ何事もなかつたかのように静かに声をかけてきたその思わぬ対応に、ホット胸を撫で下ろす。涼子は一階に上がり、ドアの開け放たれていた拓也の部屋の中を覗き込むのだが、ベッドに横たえるはずの拓也の姿はなくて不安が過ぎる。そして再び階段を駆け降りると台所にいる静恵の許にゆき「兄さんはどうしたの」と訊いた。

「心境の変化でしようがねつ。『リハビリ施設に移る』と拓也が言い出したのよ。だから今は施設での療養に切り替えているんだわよ」と、そう静恵は言った。

涼子は着替える時間も惜しみ、母から訊き出したりハビリ・センターに出掛け行つた。

個室のベッドに横たわる拓也に会うと「戻ったのかよ涼子。手紙母さんから見せられて心情は察しているんだけど、俺にさえ言わないで突然の出家だったろう。そんなに思い詰めていたのかとショックを受けたんだ。涼子がどうしても藤倉の家に戻らないというのなら、俺の方から四国に行つてしまおうかと本気で思ったよ。だから奇跡でも起こそうかと、リハビリをする気になつたんだ」

拓也はリハッピリをしていることもあり、以前のように潑刺と引き締まつた表情を見せていた。

「そんなこと考えたつて親が許す筈ないじゃないの。兄さんは私は違う存在なのよ」涼子は拓也の言葉に当惑しながら言い、更に「兄さんは、私が養女だということを以前から知っていたんじゃないかって思つたわ」と反射的に訊いた。

2 - 9

「.....」

拓也は口を噤んだまま、天井の一点に視線を突き刺していた。

「私も養女だと知りながら兄さんには隠し通していたわ。だから兄さんが知つていたとしても責める積もりなんてないの」

「.....」

「生母の眠る地を訪ねたことで、私の人生観は百八十度変わつてしまつたわよ。だからこそ、このままでは生きていられないの」

「でも、拓也が死んでしまつたのよ。死んでしまつたのよ」

まつたわ。それで私、四国の方に取り残されている祖母と暮らしていこうと決断したのよ。でも兄さんは事前に話しをしておいた方が良かつたかも知れなって、心残りでもあつたんだけど」

「……本当は高校三年のころ、涼子が養女だということを知ったんだ。黙つていて悪かつた。けど親から涼子には話すんじゃないって強く口止めされていたんだよ。それに涼子を悲しませたくもなかつたし」

「母が私を嫌つて意地悪い仕打ちをした時期もあつたけど、今では得心しているの。でもねつ、そんなときに兄さんと父さん、いつも優しくしてくれたわ」

「涼子はよく耐えてたよ」

「…………」

「体が不自由になつてしまつた拓也を異性として秘めた愛情をもち続け、そして、できることなら「結婚したい」とも思つていた涼子だが、今は儂の夢のまた夢で既に消え失せたことかも知れないと、そんな思いが脳裏を過ぎる。

「完治しないまでも自分のことぐらじ出来るようにならえすれば、静養ということで親父を説得する積もりだつたんだ。それで一方的だけど涼子の許で暮らせないかと思つてさ」

「……私の立場と兄さんは違うのに、父や母が許すはずないわよ。

「そんなこと考えないで、今はリハビリに専念すべきだわ。ラガーマンの頃のファイトを思い出して、ガンバってよ兄さん」

「親は、俺に会社を継がせるなんてこと今じゃ諦めてしまつっていて、

疎ましい存在でしかないんだよ。だから涼子が家から出て行かれるつてことの方が、特に親父にとつては辛いことなんだ」

「己を卑下する拓也だが、涼子が再び心変わりをし、家から出て行つてしまはなによつにとの願いがあった。

「祖母には私の救いが必要だと痛感したわ。きっと生母が私を祖母の許に導いたと思うのよ。だから、そんな意志に逆らつことはできないし、私自身の癒しも必要だと感じたわ」

「じゃあ、いつの日かまた藤倉家からでて行くのかよつ？」

「……そんないじより兄さん、咲子さんのことでは本当に悪いことをしてしまつたわ。御免なさいねつ」涼子は何か話題を変えなればと感じ、咄嗟に咲子のことに触れだした。

「咲子さんは俺に生きる希望を与えてくれたのに、親なんて何にも解かっちゃくれないよ。ただ俺を無菌状態で隔離することばかりしゃがるだろ？ 伝染病でも神の子でもないのだし、生きている感触を欲して何が悪いんか。そりゃうよ涼子」

「私も兄さんと咲子さんがいい話し相手になつてくれたらと、期待をしたわ。けど、その日のうちにあんなことになるなんて想像もしていなかつたことだから、私の憤慨は未だに収まつてないわつ」

涼子にも、そう思われていたとは情けない。ともかく母さんに見られことよつや、涼子に知られたことの方が、もっとショックだつたんだ」

「……咲子さんは、兄さんが好きになつたからとも言つていたわよねつ」涼子は、嫉妬心でそう言つた。

「でも俺なつ、咲子さんには感謝しているし詫びたいとも思つているんだよ。だから涼子から俺が詫びていることを咲子さんに伝えてくれないか」

「嫌よ、絶対に嫌なんだから。学校で咲子と会つても私は咲子を許せないし無視するわ」

苛立つ涼子は、再び咲子に嫉妬心を搔き立てた。

「涼子が戻つてくれたことで励みになるし、まあいいか。こつなつたら家の方がくつろいだ気分でリハビリに取り組めるから、涼子から親に頼んでくれよ」

「それも駄目よ。兄さんが進んでこのセンターに来たいと言つたんでしょう。だから親は変に取るに決まつてゐるわ。それに自宅でリハビリするなんてこと、前もそつたように甘えがでて無理だわよ」

涼子は突き放すように言つたが、拓也への熱い思いを断ちがたくなる懼れを抱いていた。

「……解かつたよ、ここでリハビリ続けたらいいんだりうさ。でも約束してくれよ、四国なんて行かないつてなつ。涼子がいなくなつたりしたら俺は本当に屍になるぞ」真顔で拓也はそう言つた。

「それなら私にだつて条件あるわつ、リハビリに努力して必ず快復するつて誓つてもらいたいのよ」

「解かつた、走り回れるように快復すればいいんだろうよ。好きな涼子が傍にいてくれさえすれば、絶対に快復してみせる」と強がり口調で精一杯のプロポーズをした拓也は、顔を赤らめた。

「…………」

涼子は拓也から思わぬ言葉を聞かされて言葉を失つた。兄の気持ちは解かつてはいたものの、初めての言葉で「好き」と言われた嬉しさと悲しみの混在感にたじろいだ。

「ねえ兄さん聞いてつ。涼子も好きよつ。でも一人の間には大きな

壁が立ちはだかっていて、乗り越えたり取り外したりすると兄と涼子の愛は壊れてしまう、そんな悲しい運命を引き摺っているんだわ」

「あのなあ涼子……」

涼子は拓也の言葉を封じるかのように、そつと唇を重ねるのであつた。

康次郎が再び出家するであらう涼子の意志を知ったのは大学卒業を間近に控えた一月下旬のことだ、涼子が運送会社に依頼して四国の祖母の許に荷物を発送したと見られる控え伝票を、静恵から見せられたからだつた。発送品目の記述に、衣類、本、雑貨類等とあり、再び懼れていた現実を目前にして康次郎は狼狽をする。そして涼子に知らせぬまま弁護士を伴つて四国に渡り、祖母の家を再度訪れた。康次郎は祖母を前にして「涼子との縁を絶ち、一度と家には迎え入れないでほしい」と懇願をした。

傍らの鈍く光る銀縁眼鏡を掛けた痩せぎすの弁護士が、康次郎からの依頼事項を記入した書類と共に一つの札束をカバンの中から徐に取りだすと、祖母の目前に差し出して条件の説明をしだす。が、無表情で無言の抵抗をするかのような祖母に康次郎も弁護士も苛立つて、険しい表情に変わつていた。仕方無さそうに再び誓約書類を祖母の目前から引き戻した弁護士は、書類の住所欄だけを代筆してしまうと祖母の手首を掴まえて、強引に掌にペンを握らせた。すると祖母は、観念して震える手で書類の氏名欄にたどたどしく名前を記してしまつ。弁護士は帯の付いた二つの札束を誓約書の写しと共に祖母の目前に差し出し直し「お婆さん、一百万円といえば大金だから大切にしまつて置くんだよ」と言つが、祖母は前に差し出された金には目をくれようともしない。

「藤倉の御家庭は申し分のない素晴らしい環境なんだから、涼子さんにとってはこの上もない幸せなはずだよ、お婆さん」

弁護士は眼鏡を外し取つてハンカチでレンズを拭きながら、祖母にそう諭す。

「涼子にとつて不足が無かつたかどうかは知らないが、少なくも私と静恵は、涼子を幸福にしてやろうと努力をしてきたんだよ」と、康次郎がそう口を挟みこむ。

2 - 12

「今更『家を出る』だのなんのつて、手塩にかけて育てられて来たはずの娘さんから酷いことを言つて出されでは、ここにおられる親御さんにとつて身を切られるほど辛いことに違いないのだよ。それくらいいお婆さんだって解かるはずだと思つがねつ」と、弁護士は祖母の頃垂れた顔の表情を下から覗き込むようにして言つて、そして更に「涼子さんの幸せも考えてやり、毅然とした態度でお婆さんが拒否してくれなければならんのだよ。そうしないと涼子さん、田を醒ます」ことが出来ないんだからねつ」と言つた。

「お婆さんを悪いようにはしないから、ぜひそいつてくれ」康次郎もそう懇願をした。

「二ヶ月後に涼子さんが来てしまつことは、お婆さんも涼子さんからの連絡や荷物が着いているだろつから解かつてていると思うけど、直接来てしまつた場合には心を鬼にして、はつきり拒絶してくれなくては約束にはならんのだよ。さもないと、お婆さんを法廷に引っ張り出すことになるんだからねつ」と、弁護士は強硬に言い含めていた、そんな経緯があった。

だが康次郎には不安の解消には至らず二ヶ月程が経過して、大学を卒業した涼子が再び四国の方に飛び立とうとしている現状下で、苛立つばかりであった。

何としても涼子を踏み止ませたいと思うが余り、卑劣ながら苦

肉な方便を弄して祖母から約束を取り付けてしまっていたそんなことが涼子に知れたとき、もはや修復できない親子の縁が絶たれてしまうのではとも不安が過ぎり、今では悔まれる。だが、もはや約束を強いた祖母の対応に期待を込めざるを得ないと観念する康次郎は、  
切歎挺腕せつしゃくわんの涙を呑んだ。

祖母とて涼子を受け入れるべきではないとの思いに胸を締め付けられていて、育ての両親に感謝こそすれど何一つ拒む理由など無いことは解かっていた。されど涼子を生き甲斐に思ってしまっている自覚もあって、祖母の心中は裏腹な矛盾を抱えていた。

2 - 13

涼子は大学の卒業を喜んでいる暇も無く韓国行きの旅券や祖母の旅行服などを携帯し、八年前に完成した瀬戸の大橋を渡る車窓から凧た水面に視線をおとし、兄の落胆は手に取るように解かりはするが、きっと両親の愛が支えてくれるに違いないし祖母には私の支えが必要だ。それに「誰」から脱却した私自身のためにも生まれ変わらねばならないと自分自身にそう言い聞かせつつ、祖母との生活に思が馳せながら桑野駅に着いた涼子は駅前で電話を掛けるが、祖母は出なかつた。きっと畠で出迎えてくれていると遙か山道上の木蓮樹のある畠方角に細めた視線を投げながら、急な山道を登つていった。しかし、そこには祖母の姿は見当たらない。

到着時間も前日に電話で知らせておいたから、いつものように電車の走る音を聴き付けて畠から山道を見下ろす習慣の祖母の姿がないことに多少の不安を覚えつも、涼子は足早に家に向かつて行つた。家に着いてみると、いつもながらに土間続きの玄関戸も縁側障子も開け放たれたまま、電話のベルがけたましく鳴り響き渡つていた。

土間に足を一步踏み入れた涼子の眼には、祖母の転寝姿が飛び込んできた。

「なんだ婆ちゃん、転寝していたのかあ。心配したわよもお」そう声を掛けながら近付く涼子だが、土間に接した和室の卓袱台脇で不自然に横たえる祖母の異変に気づき「はつ」と息を呑みこんだ。畳を変色させて転がる蓋の開けられた小瓶に涼子の眼が止まる、常に土間の片隅に置かれていた瓶で、祖母から「農薬だで触っちゃいけんがよ」と聞かされていた紛れもない農薬入りの瓶だった。

祖母の口許から流れ出た嘔吐の溶液が畳を変色させていて、祖母の掌には小袋と紙片が握られていた。涼子は震える手で祖母の体を抱き起こしたが、喉許に爪で掻き巻つたよつた祖母の傷跡を見て、一気に涙が溢れ出す。

「お婆ちゃん、私が悪かつたわ。御免なさい。本当に御免なさい。こんなに苦しめてしまつたわ……」

2 - 14

涼子は身を振り絞り、声にならない声で発し続けるばかりであった。以外にも死相は穏やかで黄泉の国へと祖母は旅立つていた。その左掌に握られている小袋と紙片を涼子はどうにか震える手で取り出して紙片を広げ、たどたどしく認められている文字を読みだした。

リヨコ、シアワセイノルタヨ、オラモシアワセタ、アリカトヨ。  
サイナラ

涼子は、手荷物の中から旅券と祖母用に買い求めていた衣服をバッグから取り出すと、旅券を祖母の胸許に忍ばせた。そして衣服で祖母の体を包み込むと小袋は涼子自身の首に掛けるのだった。

鳴り響き続ける電話のベルにも拘わらず出ようとしないでいる涼子には、藤倉家からだと感じ取っていた。いつの間にか電話のベルも止み無念さに夜明けを知らぬまま終の別れを惜しみ続けていた涼子の背越しの縁側で「娘はん来とうたがね。婆っちゃんは、そら、そこの大金を昨日も卓袱台の上に放り出したままでいとうたで、おぶけた（驚いた）が。そつで、人事ながら無用心や思うけん『しもおておかんがね』と畑にいた婆っちゃんにお節介やいたがよ。そつでも婆っちゃん何も言わんけえ心配で郵便物ねえが今日も寄つてみた。でも、娘はん来とうたで安心や」と、郵便配達人が声を掛けてきた。

気が動転していた涼子だが、郵便配達人から一方的に話しかけられたことにより、初めてその大金が目に映る。そして再び鳴りだしたけたたましい電話のベルにもかかわらず、出ようとしないでいる涼子の背後から「婆っちゃん、ねよん（寝ている）とか？……娘はん。電話が鳴つとつがよつ？」「再び郵便配達人が、怪訝そうに声を掛けていた。

## フィクション

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3027c/>

---

アガペー

2011年6月21日08時20分発行